

郷土あかし

第36号

発行 五日市郷土館 東京都あきる野市五日市920-1 電話 042-596-4069

多摩の養蚕 ～その発展を支えた成進社と風穴蚕種～

坂 上 洋 之（元あきる野市文化財保護審議会委員）

はじめに

安政6年（1859）6月横浜が開港されました。人々は何が売れるかわからないので、いろいろな品物を店に並べた中で、当初から爆発的に売れたのが生糸と蚕種でした。茶もよく売れました。当時、欧州の養蚕業が微粒子病の蔓延で壊滅的な打撃を受け、生糸や蚕種の生産が無に等しい状況の中での開港だったからでした。

以後、明治・大正・昭和の第二次世界大戦前まで、養蚕は主要な生産業として日本の近代化、富国強兵を支える経済基盤の一つとなります。特に西多摩地域は水田に恵まれず畑作が主でしたから、桑を植え蚕を飼う農家が多く、以下そうした盛況を支えた状況の一側面を見ていこうと思います。

1 下田伊左衛門と成進社

多摩の養蚕業を語るとき、下田と成進社を除外する訳にはいきません。幕末安政2年（1855）、羽村の小作に生まれた下田は、開国後ブームとなった長野・群馬・埼玉など近県の蚕業隆盛を目の当たりにして、地元養蚕業のさらなる育成を志し、明治10年（1877）頃よりおよそ10年間、養蚕先進地域や先覚的な養蚕家への数度にわたる巡遊・視察を繰り返して彼自身の知識・技術の向上習得に努めました。

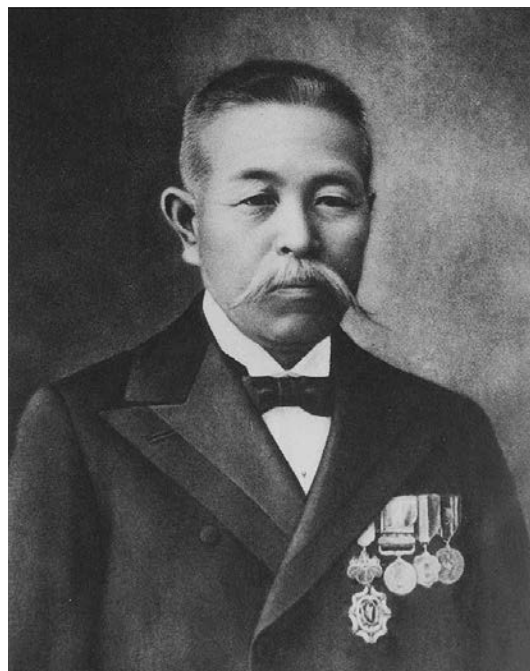
羽村村内には江戸時代に玉川上水元羽村堰の水番人を務めてきた指田茂十郎等の先達もいて、巡遊に同道することもありました。

その中で、下田が習得したのが奥州梁川地方（福島県）で行われていた温暖育による飼育法、上州（群馬県）島村の田島弥三郎から習得した顕微鏡に

よる蚕病検査法などでした。年齢からいうと22歳から32歳にかけての頃です。

恐らくこの巡遊・視察時代の下田の心の中には、生糸や蚕種輸出の増大に伴う産業先進地の繁栄・活況に比べ、地元羽村や多摩地方の貧しさや蚕業の遅れを痛切に感じるものがあったと思われます。それ故に、このような先進技術・方法の導入こそ地元活性化・繁栄に結びつくと確信したに違いありません。

このような経緯を経て、下田は明治20年（1887）1月に私立蚕病検査法講習所を開設し、同8月に宗寿館蚕業試験場、11月には微粒子病検査法講習所を設置しました。



成進社社長 下田伊左衛門
安政3年（1856）～大正4年（1915）
（羽村市郷土博物館提供）

明治23年（1890）10月、下田は高崎治平（福生市）、石川国太郎（昭島市）らと成進社養蚕講習所（伝習所）を設立、社長に就任しました。

当時、養蚕伝習組織の先輩格である群馬県の高山社や埼玉県競進社が、広く東京府下にまで勢力を浸透させていました。たとえば、戸倉村や周辺の村では、明治35年（1902）6月前後の養蚕期に競進社養蚕教員の森川・増田といった人から指導を受け、また、競進社養蚕社員仲間50人で日待をおこなったりしています。後発の成進社はそうした状況の中でありながら順調に発展していきました。その要因は、下田が先進地巡遊などで培ってきた幅広い知識・技術に加えて、生徒・受講生への愛情と情熱とを兼ね備えた優れた教育者であったからと言えましょう。

2 成進社の事業

- ・養蚕農家子弟の教育
- ・養蚕農家に対する講習会
- ・養蚕指導者、技術者の養成
- ・養蚕教師（教授員）の派遣
- ・種繭自主検査による品質向上
- ・優良蚕種製造販売
- ・養蚕関係の共進会、品評会開催

①子弟の教育

養蚕農家子弟は講習所内の寄宿舎で生活し、教育されました。一定期間（3年）、一定単位の学課・所定の実地課目を修了すると試験を受け、合格すると成進社員と認定され証書が交付されました。卒業した者（ほとんどが農家子弟）は自家に戻って習得した知識・技術で養蚕飼育に励んだのです。中には一定単位の学課・実地課目を修得すると、一旦退所して自宅で農業を営み、また再度入所して、未就学の課程をさらに学ぶ者もありました。

大正から昭和の戦前戦後にかけて、幾度となく繭の生産日本一を達成した、あきる野市淵上の鈴木家の当主寛太郎氏も、青年期に成進社で養蚕飼育法を学んだ人物の一人です。

入所者の多くは多摩地方や近県農家の子弟でしたが、中には人づてに或いは農業雑誌や共進会などでの評判からその存在を知って、遠方（鹿児島・御蔵島・静岡・長野など）から希望を寄せて入所する者もありました。明治41年（1908）には、はるか約200km海上の御蔵島から若い娘2人が、秋蚕飼育法習得などのために8月から10月まで2ヶ月間余滞在

したこともありました。御蔵島は人口約300余人の小さな島ですが、養蚕は盛んでした。でも春蚕のみで、すでに内地では秋蚕飼育が盛況しているから、島でもそれを取り入れようと望み、島の役人が東京府に相談したところ成進社を紹介され、入所が実現したのです。



淵上の養蚕家鈴木家の集合写真（大正13年）

②講習会の開催

養蚕飼育期の前に、各地の農会や養蚕組合からの依頼で講習会が時々行われました。その例をいくつかあげると

・明治37年（1904）3月5日～19日までの14日間、五日市農会からの依頼で開かれた講習会には、五日市町と周辺の増戸・戸倉・明治・西秋留・三ツ里各村民32名（女8）が受講しています。

・原小宮村（あきる野市）主催講習会が、明治39年（1906）2月17日～3月2日に行われました。講師は井上惣助、受講者17名で、内容は顕微鏡使用法・養蚕法・蚕病消毒法・蚕体病理など。特に殺蛹乾繭及び貯蔵法の大意を教授しました。

③養蚕指導員（教授員・教師）の派遣

①で触れたように所定の学業を終え卒業した実習生の中で特に優秀な者は、下田の推薦で各地の農会や養蚕組合に派遣され、多くは春蚕や秋蚕の一期間、食事付き・宿舍付きで滞在して指導しました。その例をいくつか挙げると、

・明治43年（1910）7月、茨城県多賀郡役所から下田あての依頼状に「秋蚕飼育教授員に、春蚕を担当した森本氏を引き続き頼む。雇用条件として秋蚕1期50円、旅費往復分を支給し、且つ食費は養蚕組合の方で負担する」とあります。これに対して、下田は1期75円を要求しています。

・明治44年（1911）3月、千葉県佐原町から派遣依頼が来て、平沼秀作氏を春秋蚕を通して150円くらいで頼みたいとしています。

・「明治39年度養蚕教授員に高山與助君を是非派遣して欲しい」。これは3月19日、神奈川県津久井郡沢井村、上沢井組からの依頼です。

・下田社長の名で、青森県三戸郡野沢村に赴任した養蚕教授員小林鶴吉からの6月16日付けの手紙によれば、当地は気候の変動が甚だしく、昼間25度位であっても、夜間に至れば10度位のこと往々にあり、桑葉は山葉ばかりで栽培していない。成進社製蚕種30枚を送って欲しいとも書いてあります。

こうした依頼は、多摩は勿論、神奈川・千葉・茨城の各県や八丈島などからも来ています。



養蚕室の様子（昭和11年）

④優良蚕種の製造頒布

政府は蚕種検査法を制定（明治30年）し、蚕病予防に対処してきました。この間、下田も独自の研究を重ね、成進社独自の蚕種繭検査規定を設け（明治24年）、成進社員が製造する蚕種の自主検査を実施し、不良蚕種の製造販売を厳しく制限しました。

ところで養蚕は、いかにして順良な繭を多量に収穫するかということが最大の目的です。温暖育はそのための飼育法ですが、優良蚕種がそれを可能にします。春蚕飼育は成進社飼育法によれば、種繭の産卵後、温度・乾湿の一定した場所に保管し、初冬時分になると水洗いをして付着物を除去した後、蚕種貯蔵器に納めて寒冷な室内で冬を越させます。4月中旬、桑の発芽の模様を見計らって貯蔵器より取り出し、次第に温度を上げながらおよそ2週間かけて催青（蚕種を孵化させるために温度や光を調節した環境に保護すること）させます。飼育は温暖育法で行い、温度・湿度・換気・清潔に留意して給桑を続け、5齢後通例34～35日で上簇（熟蚕を簇に移すこと）しました。

ちなみに明治39年の時点で成進社が製造し販売している春蚕飼育用の優良蚕種は青熟・又昔・角又・

小石丸でした。

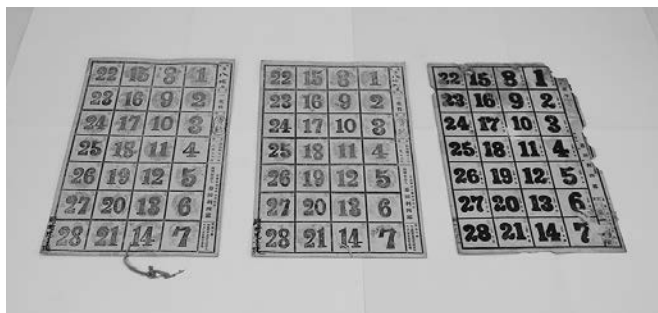
成進社製造の蚕種は社員始め多くの農家で利用されました。このようにして成進社流の養蚕飼育は、各地に普及していき、大正初年頃には社員は1万人を超えるほどになりました。

3 風穴貯蔵と秋蚕飼育の隆盛

江戸時代は勿論、明治20年頃までの養蚕は、桑葉の生長に合わせた春蚕飼育が主で、残りの葉で夏蚕を飼う所も多少はありました。

秋蚕は、成進社では明治20年から本格的に風穴秋蚕の飼育研究に通り組み始めました。この年に越冬性春蚕種を長野県南安曇郡安曇村稲核の風穴に委託貯蔵して春期の発生を抑制し、7月になってから風穴より取り出して送り返させ、発生させ、周到的な注意のもとに飼育した後に採種し、種紙は種掛けにかけて寒い暗がり保管し、翌年1月の最も寒冷かつ快晴の日を選んで再び風穴に送り、貯蔵を委託します。

以後これを繰り返し秋蚕種の改良に努めてきた結果、明治29年（1896）から本格的に製造・販売を始めました。こうした中で特に「多摩錦」と称する風穴秋蚕種が好評で、成進社流養蚕飼育の普及拡大とセットで広範囲に供給されるようになっていきました。



種紙（明治期）

ところで風穴とは何かというと、山腹・溪間・崖脚などにあって、夏季、冷たい風を吹き出す洞穴（『広辞苑』）のことで、溶岩の豊富な富士山麓などに点在します。電力に依る「人工氷庫」が出現する大正期以前には、天然の蚕種貯蔵施設として大いに利用されました。その一部は現在も観光スポットとして、行楽客に人気があります。

風穴蚕種貯蔵の始まりについては諸説ありますが、一説には幕末文久年間に信州安曇村稲核の前田という人が自宅裏の風穴に春蚕種を貯蔵し、夏秋期に飼育して好成绩を得たことからとされています。

ともあれ風穴蚕種貯蔵による秋蚕飼育は、春蚕飼育よりも飼育日数が短く、比較的農閑の時期に飼育でき、しかも蛆害にかからないという利点もあって、通常2回（時には3回）の飼育が行われるようになっていき、明治の終わり頃には春蚕の飼育量を凌駕するようになります。

因みに農商務省の調査によれば明治38年当時の風穴数は全国16県に117ヶ所あり、特に多いのが長野県（49ヶ所）と山梨県（19ヶ所）です。

中でも全国最大規模の風穴は、八田達也が経営する富士風穴八達館で、明治40年（1907）頃には百万枚の蚕種貯蔵が可能な施設として、富士山北麓の青木ヶ原に置かれていました。かつて筆者が平成10年頃、施設跡を見にいきましたが、バイクの人に荒らされる恐れがあるので途中から通行止めになっていました。

この八達館を設置した八田達也は、下田と同世代で山梨県蚕業界で活躍し、山梨県蚕糸業取締所頭取、同蚕糸協会会長として業界をリードしてきた人物です。立派な顕彰碑が子孫が経営する石和温泉八田ホテルの入り口に立っています。

この八達館を頻繁に利用したのが下田の成進社で、7月下旬に掃き立て、8月末に上簇、良繭を選んで発蛾・産卵・保管、翌年1月貯蔵箱に入れ、開通間もない中央本線（明治36年八王子―甲府）で風穴に送ります。7月頃風穴から出して返送、飼育しました。明治44年の記録によると多摩錦3,100枚、白龍200枚を1月30日に八達館に発送しています。いずれも前年の8月末から9月上旬にかけて産卵した種紙を社内に保管しておき、100枚単位で貯蔵箱に種紙を入れ、厳寒期に羽村から甲府駅（大月？）に送り、そこから貯蔵所までは馬や「たねしょい」と呼ばれた季節労働者によって運ばれました。

翌年の出穴は成進社側で養蚕組合や個人農家からあらかじめ予約注文を受け付けておいて、時期に応じて注文先へ返送させたのです。八達館では貯蔵料を成進社では販売料金がそれぞれ定められていました。

成進社は浅間山麓の長野県小諸風穴（北佐久郡川辺村）とも取引がありました。また、近年世界遺産にもなった群馬県西端の荒船山北側山麓の荒船風穴とは、下田と書簡のやりとりはありましたが、実際の取引は不明です。かつて世界遺産登録以前の平成初年頃、荒船風穴を探しに行ったことがあり、地元

の役場でもその存在は忘れ去られていて、探し当てるのに一苦労しました。

一方、東京府でも風穴隆盛に目を付け、明治43年、下田查一（二代目伊左衛門）に西多摩郡氷川村（奥多摩町）の鯉沢風穴での実験を依頼しています。結果については不明です。檜原村（西多摩郡）でも風穴貯蔵が行われたという話を聞いたことがあります。

風穴蚕種貯蔵は、明治後半から大正初期をピークに盛んでしたが、やがて東京市内の会社経営工場などに設置された「人工冷蔵庫」が普及するようになると、それらにとって代わっていきました。



まゆと絹糸

参考文献

- ① 羽村市史料集四 『「成進社」関係史料（一）』 羽村市教育委員会 平成9年3月31日発行
- ② 羽村市史料集五 『「成進社」関係史料（二）』 羽村市教育委員会 平成10年3月31日発行
- ③ 羽村市史料集六 『「成進社」関係史料（三）』 羽村市教育委員会 平成11年3月31日発行
- ④ 『日本風穴蚕種論』 久保田松吉 明治42年発行
- ⑤ 『西多摩村誌』 西多摩村役場 昭和3年発行
- ⑥ 『まゆの國』 井上善治郎 埼玉新聞社 昭和52年4月発行
- ⑦ 『儀三郎日記（五）』 あきる野市教育委員会 平成16年10月1日発行